
D.C.? ～運命の歯車が廻るとき～

ナック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D・C・? ～運命の歯車が廻るとき～

【Nコード】

N7952V

【作者名】

ナック

【あらすじ】

謎の少年、杉山によってなぜか転送された主人公神田 悠斗。そこから始まるたくさんの出会い、たくさんの別れ。そして枯れない桜の枯れない願いはやがて……。こそばゆい学園恋愛ゲームD・C・?による二次創作！原作無視？義之フラグ絶望化？どうでもいい！！注：ハーレム系っぽくなるので苦手な人はブラウザバックへGO！

モルモットか俺は！（前書き）

ダカーポはじめました。（なんか冷やしそうめんはじめましたみたいなフリーズだな）

念願の！ですよ奥さん！

多分ダレが喋ってるんだ？てなことが起こると思いますので、そういった場合は遠慮なく指摘してください！

自分でも正直不安なので！

モルモットか俺は！

さて、と……。

今の現状を話したいと思う。

それは、どうして俺が意味不明な機械の実験台になっているかということ……。

「どうした神田よ、そんなに怯えて」

誰のせいだと思ってやがる！！

「はっはっは！ 嬉しがるがいい同志、神田悠斗かんだゆうとよ！ 僕の研究台になれるのだぞ！」

「誰がこんなに縛られて嬉しがるかぁ！ 最低だわ！」

そう、今の俺は鎖でがつちりと全身を固められていた。

こんな状況で嬉しがるなど、余程のMでない限りあり得ない。

「しかし感じるのだ、神田よ。もし僕が超美少女だったら……」

「……おお」

超美少女に襲われそうになったところを想像してみた。た、確かにいいかも。

いやおい待てこら（超笑顔）

「いやいやいや！ 俺はMになつた覚えはない！」

「たしか、ドMだったか」

「ちがうよ！？ もつと最悪になつてんじゃねーか！」

「そんなことはどうでもいいからはやく始めるぞ」

「せっかちなんだね！？ ってゆうかなにをするかも教えてくれな
いのね！？」

「うるさい黙らないとM疑い学校に広めるぞ」

「それだけはやめてください」

え、プライド？ なにそれおいしいの？

「このマシンは転送マシンだ」

「……転送？」

なんだろう。とても嫌な予感がする。

「その予感とやらは的中だ」

「人の心読むなッ！　ってかそれ言っでよかったのか！？」

「とりあえず入っでみてくれ」

「こんな正体不明なものに入れとッ！？」

こいつは毎回変な機械を開発しては、俺を実験台にする。モルモット

いくら悪友とはいえ、実験台になるのは御免だ！モルモット

「とか言っでる間にスイッチは押しちゃっでるんだがな」

ゴゴゴゴゴ……と愉快な機械音が鳴り……　ってか

「嘘だろおおおおお！？」

いつの間にか俺の体はカプセルの中に入れられ、杉山はにやりとした表情のまま訴えてきた。

「後で俺も行くから安心しろ」

そんなこと言われても安心できねえ！と反論したかったがあまりにも衝撃的だったので、声が全く出なかった。

「それでは来世でまた会おう。ポチッとな」

「死亡フラグうううううー！！」

こうして俺は、こいつのせいで見知らぬ世界へと転送されることとなる。

……それ以前にこれが成功したら、の話だが。

「転送先は……ふむ、D・C・？か。これまた面白そうになりそうだ」

とりあえず杉山は次会ったらぶん殴ろう。

モルモットか俺は！（後書き）

ちなみに今出てる杉山と杉並は別人です。
本編にも書きますが、一応……ね。

それは廻り出す歯車のように（前書き）

連続とうこおおおう！

……はい。すいませんでした。

それは廻り出す齒車のように

深々と

桜が舞っていた。

驚くほどゆつたりと、

音もなく、

見渡す限りに舞い散る桜の花びら。

それは一面を色づけるように、

白で塗りつぶされた世界を彩るように、

ただゆつたりと舞い踊っていた。

それはとても綺麗で、

呆れるくらいとても綺麗で、

ひとりぼっちで、

ただ震えることしかできなくて、

寂しくて、

どうしようもなく途方にくれていたボクでさえ、見惚れてしまうく

らい、

綺麗な景色だった。

だから、

だからこれはきっと夢なんと思った。

真っ白な夢。

夢のような夢。

いつか覚めてしまうことがわかっているのに、

それでも夢見ることが夢見てしまう。

新しい予感に胸を膨らませるような、

陽だまりの中でふと涙をこぼしてしまつような、

冬の最中に春の訪れを待ち望むような。

夢

差し伸べられた手をぎゅっと掴む。

温かな手。

凍える世界で、

雪の中で、

ぬくもりを確かめるように、

ぎゅっと。

そんな、

始まりを告げる夢の始まり――。

そして今も運命の歯車は、ゆっくりと動き出そうとしている。

*

ほんととは、やってはいけないことだってわかってる。
でも、寂しかった。

ボクが桜の木のバグを修正するために研究を重ねていく中、ボク
の大切な人達は結婚して幸せな家庭を築いていく。

――ボクはいつまで一人で居なくちゃいけないの……？

一人が、嫌だった。

だから初音島に戻って、桜の試作品サンプルを使って願ってしまった。

ボクにも家族が欲しい。もうひとつの現在を見せてくださいと……。

そして、一人の男の子が生まれた。

ボクにも家族ができて、もう一人じゃないと心から喜びが溢れてきた。

でも一方で恐怖もあった。

『もし、ボクが桜の制御を間違えたら彼は……』

「はじめまして、こんばんは」

「……………」

「ボクの名前は芳乃よしのさくらって言うんだ。……えっ」と

少し、躊躇ためらってしまふ。

もしこの子に名前を付けてしまったら後戻りできなくなると思ってたから……

「さくらいよしゆき」

でも、もう決めたんだ。

「……………」

よしゆき君はよく分からなかったのか、少し首を傾げた。

「君の名前だよ」

「……うん」

笑顔で返してくれた、大切な家族。

「じゃあ行こっか……んんっ？」

不意に、魔法の気配がした気がした。

いったい何かあったんだろう……！？

「ちよっと待っててね」

不安になったボクは気配のもとへと、駆けだした。

＊

「いててっ……なんなんだよこ」

急に浮遊感がしたかと思えば、俺はまるつきしさつきとは別の場所に来ていた。

「雪……？」

こんなに桜が綺麗だというのに、雪が降っていてとても寒い。季節外れだな……とその様子を眺めてみる。

桜の花びらと粉雪の合間に見えるおおきな桜の木。

その姿は美しく、初めて見た俺も懐かしい気持ちとさせた。

——おっと、こんなところでぼーっと立ってたら誰かに見つかったちまう尻餅をついていた腰をなんとか起こし（このとき何故が異常に軽かった）その場に立った。

「にしても、なんか視界が低いような……？」

そろそろ俺も老いたか——って俺１７歳だからね！？全然若いからね！？

「とりあえず、誰にも見つかりませんように……っ」と

まあ夜中みただしそう容易く見つかりやしないだろう。

「……ねえ、君なにしてるの？」

「……あ」

金髪の幼……小さい女の子に見つかってしまった。

「君みたいな子供がこんな夜中に……」

「それを言つとあんたもだろう」

だって明らか幼……小さい女の子だもん。

「……ずいぶんと失礼なこと考えてるみたいだね」

「うおおッ！？意外と鋭かった！」

「えっと……なんか見たことあるよーな、ないよーなあ……」

「……？　ところで君みたいな男の子がどうしてここにいるの？」
「いや男の子って……。そう呼ばれたの久しぶりだぞ。」

「だいたい、俺17だし」

「17……17………ええッ!？」

なんかこの人、マスオさんの感じで驚いてる。

いや声は似てないですけどね。それはもう感じることだね。

「俺そんなに若く見えたか……?」

あ、でも髪の色が赤いから中学生の不良少年と間違われて、署に連行されたときがあつたな。

あれは嫌な思い出……。

「若いもなにも、小さいよ……」

「小さい?」

そういえば、この人小さそうなのにどうして俺はこの人の膝くらいなんだろう……?

はっ!　もしかこの人巨大化したのか!?

「鏡あるよ?」

借りて自分の顔を見てみた。……心なしか、顔がふつくらとして
いる気がする。

鏡を遠ざけて全身を見てみた。……明らか、子供の身長だ。

そして最後に、にかつと鏡に向かって笑顔を作った。……きめえ
……。……。

「杉山の奴、幼児退行するとか言ってなかったじゃねえか!　あんのやろー!」

「(やっぱり、この子から魔法の力が僅かだけ感じる……)」

「どうしようどうしよう……こんなでこれからどう生きていくんだあ!」

「帰る場所ないの?」

「うぐっ……」

この娘に感づかれてしまった……。

「帰る場所がないのならボクが相談にのるよ」

「……はあ」

大丈夫なのかこれ。というかここはどこなんだろうか。

でも知らない人に付いていくとメツ！って言われてきたしなあ……。

…。

「その代わり、君の名前とどうしてここにいるのか教えてもらおうよ」

どうやらこの人はそこが目当てなんだろう。

どうしてここにいいのか……疑問に思い、そして警戒している。

はあ……。めんどいことになったもんだ。

「分かった。その代わり俺も教えてもらいたいことがある」

「教えてもらいたいこと……。わかったよ」

どうやらそう言われて不安なようだ。

まあお互い隠しているみたいなの？

「俺の名前は神田悠斗だ」

「ボクは芳乃さくらだよ。よろしくね」

芳乃……さく……ら……はっ！？

ままま、まさか………！？

ここ、D・C・？ですか！？

「ど、どうしたの？」

「まじかよ……」

ああ、そういえば杉山のアホが転送とか言ってたな。まさかゲームの世界とは……

「い、いえなんでもありませんよ。じゃあ俺から質問していいですか？」

「どうして急に敬語！？」

「え、っ……ほら、年上ですし？」

実年齢？ それは言っちゃいかんذار。

「き、急に敬語にしなくてもいいんだよ？」

優しさだろうか、それとも俺に敬語は似合わないということだろうか。

……後者の可能性の方が高めな。

「まあでも、こっちの方が適応かと」

「はあ……っで質問したいことって……？」

ふむ。色々と質問しなければいけないことはたくさんあるのだが、どうしよう。

俺は確かにダカーポは知っているがあくまでも……だ。

超むつかーしにやってそれ以来やってない。なので裏覚えなのだ！

「え……っ。さつき桜の木が光ってたような気がするんですが、何だったんでしょう？」

「……ごめん、それは言えないんだ」

うむ、ここまでは予想通り。

なんだっけなあストーリー……。

大体半か月前くらいか？プレイしてたの。

うーん、思いだせん。

「他に質問とかあるかな……？」

「あ、じゃあここですか？」

「あれ、分らないかな？ ここは初音島。桜の有名な……島だよ」

初音〇クではない。初音島ねおーけー。

「うーん、あとなにあるかなあー」

「……ボクも、質問……していい？」

「いいですよ？」

そういつてさくらさんは考え込んだ。

まあ、俺もどんな質問かは予想くらいいつているが。

「君は……どうして、ここにいるのかな？」

他にも聞きたいことがあると言いたげな感じだった。

「えーと、俺は……」

頭の中で3つの選択肢が浮かびあがる。

一つは、本当のことを言う。

二つは、嘘をついてごまかす。

三つ目は……その場から逃げ出す？

「うーん……」

三つ目はないとして……二つ目か？

でも俺嘘つくの苦手だし嫌いだし……よし！

「俺は一つ目をチョイスだっ！」

「……へっ？」

「あ、すいません。失言です」

えーと、深呼吸深呼吸。

「実はですね……」

「大変なことに巻き込まれたんだね、君も……」

うむ、さくらさんに全部伝えれた。

あっさりと信じてくれたな見事に。

「……じゃあ、桜のことも知らないよね……」

「ん？ 何か言いました？」

「にやはは、失言失言！ お気になさらずー」

「はあ……」

子供のような人だな。ほんと。

しかし……ここが本当に枯れない桜がある世界か……。

どんなのだっけ？ 確か最後、さくらさんが……

「……」

「どうしたの？」

一瞬、気が重くなった。

なんか……嫌な感じがする。

「ねえ、さくらさん……」

「どうしたの？」

「一人が、悲しかったのか？」

「——っ!？」

なぜ、このようなことを言ったのか、分からない。
しかし勝手に口が動いたのだ。

「どうして……」

さくらさんは俯いたまま、口を開く。

「どうして……そう思ったの……?」

「なんでかな……。空気で分かるよ?」

この人は、確か、確か……。

枯れない桜のせいで……確か……。

ダメだ。肝心なことを忘れている。

こんなことなら、またプレイしときゃよかった。

「……ひくっ」

確かに聞こえた。

誰かが、泣く声。

もちろん、それは目の前の人。

泣かせてしまった。……そういう罪悪感が生まれた。

自分のせいじゃないかもしれない。

でも、泣いているのは確かで。

少なくとも彼女は、なにかを抱えている……そんな気がした。

だって、空気で分かるさ。

「さくらさん、ちょっとしゃがんでくれないかな?」

「……ふへえ?」

さくらさんがしゃがみこんだ途端。

「うにゃあっ!？」

「大げさだなあ。子供に抱きつかれてるだけでしょ?」

そつと、抱きしめた。

なぜか子供になっっている俺は正直、抱かれてる気分だったけど。

「泣いてもいいよ。俺の前で」

誰かがこそそ泣いているのは見たくなかった。

「つらいんだろ？ 悲しいんだろ？」

自分は、何もできないけど。

「だったら……今ここで、全部出しちゃえよ」

「うううう………うわああああん!!」

それは、なにかの始まりだったのかもしれない。

杉山のせいでこんなとこに来てしまったけど……でもどうでもいいと思った。

一度動き出した歯車は、もう止まらない。

一つ動くとまた一つ動く。

繰り返し、繰り返し。

まるで……ダ・カーポのように。

それは廻り出す齒車のように（後書き）

さくらさん！書いて楽しいわっぱ！

ちなみに作者が好きなキャラはダントツでさくらさんです。

2位は音姫。3位は……こっから決められないなあなかなか。

自分はやつとPSPで原作買ったので小説開始できるんですよー。

でもまあ、全部のキャラ攻略できてないけども。

手を引かれて目指した場所（前書き）

（主人公設定）

かんだゆうと

神田悠斗

赤い髪に青い眼をした少年。

元17歳。

料理が得意で勉強は全然できない。

魔法を使うことも出来ず、ごく普通の一般人。

見た目ヤクザかホストっぽいのだが中身は超優しい子。

運動が得意でクラブは帰宅部だがよく助っ人として運動部にも出る。

どのスポーツも好きだが一番はバスケット。

そしてなかなかの鈍感。モテ男。

ゲームが大好きなのでギャルゲーみたいなものも好んでする。

ただ、すぐに内容を忘れる。

別名（異名？）：優しいヤクザ

手を引かれて目指した場所

「泣きやんだ？」

「うわー、振り返ってみたけど結構大胆なことしたな俺。
なんか今更顔が赤くなってきたんすけど。」

「……うん。ありがとう」

「どういたしまして。で、あそこにいる男の子はどうするんですか」
「……あつ」

「うんすっかり忘れてたみたいだな。」

「誰だっけ？多分主人公のはずだったが。」

「ヨシヒコ？ちがうな、ヨシミツ？うんなんか惜しい感じ。」

「あう……」

「しかもちよつと怖がられてんなあ。多分同い年くらいなのに。」

「こんばんは」

「こ、こんばんわ……」

「うんさすがヤクザみたいだねと言われてきた俺。嫌われてやんの
おー。」

「……なんか、切なくなってきた。」

「にやはは、この子は義之くん。ボクの……拾い子？　かな」

「それを見かねた目の少し赤いさくらはさんは、笑いながら会話を続
けてくれた。」

「はじめまして、俺は神田悠斗。まあよろしく頼むわ」

「ぼ、ぼくはさくらいよしゆきです。よろしく」

「なかなかいい子だ。きちんと自己紹介ができてる。」

「じゃあ、帰ろうか」

「あの……さくらさん。俺はどうするんでしょう？」

「へ？　もちろん一緒に帰るんだよ？」

「なんと親切な方。女神様かつ！」

「とにかく寝る場所が確保できるのは嬉しい。」

「えへへー、二人共もっちろんおてて繋いでねっ」
「んなっ!？」

「えへへー」

「……………」

「……………あはは」

なんか気まずそうに笑う義之と無言な俺。

こない年こいておててとか……………おててとかあああ!

「ふんふふーん」

機嫌良さそうだなあ。まあ、嬉しいけども。

「ねーねっ!　そういえばボク義之くんに名前呼ばれてないよねえ?」

「そっすね」

「わっ、すごい気のない返事だなあ悠斗くん」

いやだって急にハイテンションじゃん?

なんか今のさくらさんはさっきと違ってまるで、恋人とデートに行くかのようなテンションじゃん。

……………恋人いなくせに分かんのかよ、って思ったやつ、表に出る。

「えへへー（もしかするとお兄ちゃん以上の相手かも!）」

なんかじろじろ見られてんなあ俺。

「とりあえず、義之。だんな!でもおやつさん!でもいいから呼んでやれ」

「んにゃ!？　ボクは男じゃないよ!」

「えっ、えーと……………」

困惑の顔を浮かべる義之。苦労してんなあ。

「う、え、えと……………」

「おっ？」

さくらさんと俺の視線。大分キツイぜ？

「さ、……さくらさん」

おいおい、耳まで真っ赤だぞ義之。

「えへへ」 やつと呼んでくれたねっ」

笑顔一杯のさくらさん。……元気だなあ。

「で、どこに向かっているんですか？」

「いいところだよ。暖かくて、にぎやかで、ごはんがいっぱい食べられるところ」

『ぐう~~~~』

「はうっ！」

ご飯という単語が出てきたときに義之の腹がキャッチして、サイレンのような小さな音が鳴った。

「あはは、お腹すいた？ もうすぐだからね」

「うううー」

さっき以上に義之が赤くなっていく。ゆでたこのようだ。

俺も、腹空いてきたな……。

「あ、着いたよ！」

いかにも一般の家ですっ、といった形で俺の目の前には、朝倉と書かれた表札の家が現れた。

「お兄ちゃんの家なんだけどね。みんないい人だよ？」

「わあ……」

興味津々だな義之。俺は寝所がありや別にいいし。

さっそくさくらさんはインターホンを押す。

中から「はい」と可愛らしい声が聞こえてきた。

ばたばたと急いでいる音も聞こえる。

「じ——」

ドアの隙間から小さな女の子が珍しそうに俺達を見つめる。

じーと擬音を言ってるところが可愛いなあ。

いっとくけど俺ロリコンじゃないからね？　ロリコンじゃないか

らね？　大事なことから二回言いました。

「え、あ、えっと」

「じ——」

「あ、あの」

「じ——」

「さ、さくらさん……ゆうと………」

お、とうとうあきらめたか。

「にやはは、こんばんは由夢ちゃん」

「こんばんは」

それでも由夢という子は俺達に目を向けたまま。

「この子が義之くん。この前お話した子ね」

「うん」

「で、この子は悠斗くん。ちょっと事情があって連れてきたんだ」

「うん」

可愛いなあこんちくしょう。

ちっこいころってこんな可愛いもんなのかね？

「音姫ちゃんもおいで」

さくらさんがドアの向こう側に向かって青春を叫ぶ……ではなく、
声をかける。

「……………」

小さく漏れる息と共に、ドアからもう一つの顔が飛び出した。

「ほら、ゆめ。ちゃんとそとにでて」

「はい」

姉妹なのだろうか、大と小の小さな女の子達が俺達の前を立つ。

「ボクはお兄ちゃんに話があるから、後は適当にやってね。頼んだ
よ悠斗くん」

「了解」

さくらさんには俺のこと全部話してあるので一応年長者……とい
うわけで頼んだのだろう。

「ちゃんと仲良くするんだよー」

さくらさんはそう言っただけで家の中に入ってしまった。

「さてっ」と

注がれる鋭い視線。

「自己紹介でもするか。俺は、神田悠斗。よろしくなっ」

「えと、さくらいよしゆきです。よろしく」

義之はぺこりと頭を下げて顔を上げてから、手を差し伸べた。

「……あはは」

しかし、その手に触れるものではなく。

「……………」

ゆつくりとその手を戻そうとする。

そんな義之の小さな手に、そっと。これまた小さな手が触れた。

「えっと」

「ゆめ」

「へ？」

「あさくらゆめ」

由夢ちゃんにはこーっと笑顔を見せる。

うつ、可愛いのおこやつ。

「あーっと、名前？」

「こら義之。名前以外になにがあるんだよ」

由夢ちゃんは今度は俺の前に律儀にまた挨拶をしてくれた。

「あさくらゆめ」

「おうおう、由夢ね？　よろしくな」

「……うんっ」

ほんのりと、由夢の頬はそっと赤みを増す。

……ん、なんで赤くなんの？　寒いのか？

「よろしくね、お……おにいちゃんたち」

「うおっほーい……お持ち帰りしてえ。」

「……むっ」

俺がだらしのない顔をしてると大きい方……恐らく、この子のお姉ちゃんが拗ねたような顔をする。

「おとめ」

ぼつりと言ったその声は気を抜いてしまつと聞き逃しそうだった。

「音姫っていうんだな？ よろしくな！」

「………」

あちゃー、家の中に入っちゃった。

でもこの子もなんか頬が……気のせいかな？

「ぼく、もしかしてめいわくだった？」

義之が不安そうに由夢に問いかけた。

「んー、そんなことないよ」

「でも」

「おねえちゃん、さんきんおこつてばかりだからきにしないでいよ」

由夢はにこつと義之にまたまた笑顔を向ける。ちっ、ラブルジョワめっ！

「おじいちゃんも、お母さんもだいかんげいって言ってたもん」

あー、そーいや俺の親父。どうしてっかな。

ま、どうせその辺どろぼーでもしてんだろうけどよ。

「わ、わたしもいやじゃないし」

うー寒くなってきたのお。

「ゆうとお兄ちゃん。どーしたの？」

「うえっ、ああ、ごめんごめん。……瞑想してた」

「めーそっ？」

「……うんそっ」

瞑想〓話聞いてませんでした。だからな……。

「それよりも、はやく中に入ろっ？」

「そっだね。寒いしね」

こういうことはちゃっかり返事する俺。

「んじゃ、おじゃましーす」

「あ。え、えと、おじゃまします」

「ちがうよ」

「ほへ？」

由夢に止められる。

あ、そっか。

「ここはお兄ちゃん達の家になるの」

「へっ……？」

まだ分らない、といった顔をする義之。

「ただいま」

「ゆうと？」

「ただいまだぞ、義之」

「あっ」

ようやく分かった義之はぱあーっと笑顔を浮かべる。

「ただいま」

それは、俺達がこの家の一員として認められる日。

突撃っ！ 俺達の晩御飯ー！（前書き）

由夢の料理下手の真実が明かされるっ！

突撃っ！ 俺達の晩御飯ー！

こうして俺達が朝倉家に住んで、だいぶ日にちが経った。
今さくらさんは仕事かなんかで家を出かけている。

なんと、さくらさんはなんちゃら学園の学園長らしい。

……なんて学園だっけ。

まいっか。

そんでもって、今家にいるのは音姉（どうやらお姉ちゃんらしい）と由夢と義之と俺と……純一さんだけだ。

ついでに純一さんとは、音姉と由夢のおじいちゃんらしく、この家の大黒柱……というものか。

しかし驚異のめんどくさがりだ。

だから、朝倉家の食事は……。

「……おいしいね」

そう。外食がコンビニ弁当である。

「純一さん。いくらさくらさんがいないからといって、毎日これはちよっと……」

たまらなくなつて、聞いてみた俺。

というか、この世界にもコンビニはあるんだな。助かったぜ。

「ははは、慣れればおいしいよ」

……なんという、大人だ。

まあ、騙されてる子供達はおいしそうに食べてるが。

いくらなんでも、偏るんじゃないか？

「純一さんは飯作らないんですか」

「かつたるい」

即答かよ！

「こりゃ、晩飯も弁当だな……」

「冷たいご飯もおいしいよ、ゆうつ」

義之……どうして、ひもじい子になつてしまったんだあ！

くっ、考えたら涙がつ！

「これはダメだ！　こうなったら……」
俺が作るしかあるまい！

「……火をつかったら、ダメっておじいちゃんが言ってたよ」

音姉がぶすつと言った。

でもさすが面倒見のいいお姉ちゃんだ。

心配してくれてるんだろう。

「大丈夫だよ。純一さんには内緒な？」

今俺は、音姉と一緒に台所に立ってる。

あの無口な音姉も、料理には興味あるらしくついてきた。

「……料理するなら本読んだら？」

渡されたのは料理本。

……『サルでも分かる、簡単料理』ねえ……………。

「どこにあつたんだ？」

「おばあちゃんの部屋」

なるほどね。音夢さんのね。なんかすごい納得した俺。

「音姉も手伝ってくれる？」

「……」

こくり、とうなずいてくれる。

今まで音姉とはあんまり喋ってくれなかったから、嬉しいこつた。

「ゆつと、なにしてるの？」

「ゆつとおにいちゃんー、あそぼー！」

ここで由夢と義之が登場。

ちよつといい機会だ。この際二人にも手伝ってもらおう。

「よーし、料理しますか！」

「こらゆめ、あぶないよ」

「だいじょうぶだよおねえちゃん！ このくらい……うわぁっ！」

「義之！ それ塩じゃなくて砂糖だからっ！」

「えっ？ あ……入れちゃった」

「ゆ、ゆめ！ 包丁もっちゃダメ！」

「だいじょうぶだよおねえちゃん！ それくらい……あうっ！」

「由夢！？ 大丈夫かあ！？」

「うっ、うええええええんっ！！」

なんとという力オスな状況。

やはり、みんなには早かったか……。

「ほら、由夢。傷見せてごらん」

「ううっ……。ぐすん」

浅いから大丈夫だな。

「よし、洗って絆創膏貼つときや大丈夫だ」

ダメだ、この子達にはまだ早い。

料理はゆつくり教えよう。

「みんな、やつぱり戻りなさい」

「「えええええー」」

義之と音姉がブーイングした。

「戻りなさい！」

「「はい……」」

しぶしぶ帰っていった二人。由夢も泣きながら自分の部屋に帰った。

「ふー、さて……」

……料理の前に、掃除しなきゃな。

「はい、できましたよー」

「おおー！ こりゃあすごい」

純一さんが目を丸くして俺の作った料理を見ている。

「おいしそうだねゆうと」

「……………わぁ」

義之も音姉も目を輝かせている。

「あれ、義之。由夢は？」

「ゆめちゃんね。なんか、料理なんてもうきらいー、って部屋に帰ったよ」

「ま、匂いにつられて戻ってくんだろ」

ちなみに俺が作った料理はハンバーグとかシチューとかだ。

子供の定番ってやつだな。

「じゃ、いただきますーすっ」

「いただきます！」

「うまそうだ」

「……………いただきます」

みんなパクパクと久しぶりの手料理にありつく。

今までさくらさんが作ってたからな。

今じゃないないし。

「おいしい！」

「うまい！」

「……………おいしい」

みんな一人一人感想を言っていく。
いい気分だ。

「我ながらなかなかの出来」

久しぶりに料理したし、それも子供だから時間かかったがな。

「じー」

「ほら、由夢。おいで」

「……………うんっ！」

今日も朝倉家はほのぼのと楽しい食事をみんなでしていた。

それ以降、音姉と義之は料理の練習を続けた。
え、由夢？ …… なんかトラウマになってたが。
とりあえず、コンビ二弁当グッバイだ！

大切な約束（前書き）

音姉フラグ絶好調♪

……すまねえだ義之くん。

大切な約束

「はあ、はあ、はあ……！」

くそ、いない。どこにも、いない。

どこに、どこに行っただんだ音姉！

「くそつ、もう一回探しに行くか」

どうして、音姉が姿を消したのかというと。

音姉と由夢の大切なお母さん…… 由姫さんが、亡くなったからだ。

俺も一度由姫さんに会ったことがある。

この前、お見舞いに行ったときのことだ。

あの時は全然元気だったのに、日に日にやつれていったらしい。

あの時ほど悔しかったときはなかった。

もっと会っておけばよかった。

話がしたかった。

こんな思いをしたのは、今日で二度目。

由姫さんの雰囲気は、俺の母さんとまるつきり似ていた。

大切な人を二度も亡くした思い。

悔しかった。

寂しかった。

切なかった。

なのに、また、あの時と同じことを繰り返してる。

「なんで、なんでいないんだよつ、音姉！」

葬式の日、聞こえるのは由夢の泣き声だけ。

音姉は泣いていなかった。

でもそれは見た目だけ。

いつも誰もいないところで泣いている。

そして気づいたら、音姉はいなくなっていた。

「やべえ、日没が近づいてる」

このままだと、暗くなってしまう。

「あと探していないところは……」

一つ、一つだけあった。

「信号なんて待ってられっか！」

ひたすら走る。

誰かにぶつかる。

止められそうになる。

怒られる。

でも。

「……いた……」

音姉は公園のベンチに座っていた。

「……」

顔は下を向いていて、その姿は泣いていたように見える。

「音姉。ここにいたのか」

「……」

「おい、音姉。聞こえてるか？」

「……聞こえてるよ」

ぽつりと静かに口を開いた。

「よかった。皆、心配してるぞ？」

そつと、音姉の隣に座った。

「……いいの」

「よくないよ。会話もしないし、食べもしない。そのままだと、病

気になるぞ」

「……いいの！」

「よくない」

「このまま……病気になるの」

「病気になったらつらいぞ」

「みんな、分かってないんだよ！ みんなお母さんがいなくなっても平気なんだもん！」

「平気なわけっ、ないだろうっ！？」

「……………っ」

つい、必死になって答えた。

びっくりしたかもしれない。それでも。

「みんな、悲しいよ。つらいよ。音姉と一緒に思いなんだよ」

音姉を、助きたい。

「……………でも」

「それに音姉まで病気になったら、その後みんなどうすればいいんだよ」

「そ、それは」

「俺は嫌だね、そんなの」

そっと息を吸う。

空はもう、赤く染まっていた。

「……………今、俺達がずっーと悲しんでるままだったら、由姫さんはどう思うだろうな」

「えっ？」

「怒るだろうな。音姉が病気になっても」

「……………うん」

あの人のことだ。夢にでも出てきて怒るだろう。

「それとも悲しむかな。由姫さんは」

「……………おかあさんをかなしませたくない」

「だったら」

俺は席を立ち、音姉の前に立った。

「約束しよう」

「やくそく？」

「ああ。俺達は秘密を共有し、協力して今を生きること。ずっとだ」
「知ってるよ」

「んっ？」

音姉は急に笑顔になった。

初めて、笑顔を見せた。

「あのね、それをね。いつしんどうたいって言うんだよ！」

「一心同体？」

あれ、原作でもそんなこと言ってたような気がするぞ？

え、これ音姫フラグ？

「うん！」

そう言って音姉は手から大福を出した。

……大福？

「ど、どっから出したんだこれ！？」

「すげっ！ 手品？」

「私はね、せいぎのまほうつかいなんだよ」

「せいぎのまほうつかい？」

なんと可愛らしい。

「これ、あげるよ」

「さ、さんきゅ」

ぱくつと一口で飲み込む。

「あ、うまい」

「でしょ？」

本当、笑顔を見せるようになってくれたな。

とても、嬉しい。

「でもこれ、どうやって出したんだ？」

「まほうだよ」

「……魔法ねえ」

ちよつとうさんくさい気もするが。

「これは誰にも言っちゃだめだよ。私の秘密だからね」
「分かったよ」

そこら辺はしっかりしてるなあ。

「あのね、せいぎのまほうつかいは正体を隠すんだよ」
「やっぱ子供だわ。」

「じゃ音姉の秘密1個な」

「キミの秘密は？」

「俺の秘密、教えてやろうか？」

もちろん俺の秘密は……にやり。

「ええええええええ——！？」

はい、びつくり仰天いただきました！。

「う、うそっ！？　じゃあキミはこの世界の人じゃないな、うん」

「ええええええええ——！？」

そんなに驚くことか？

「しょ、しょうこは？」

「えっーと、これかな？」

音姉に前の世界の学生証を渡す。
なぜか持っていたものだ。

「ほ、ほんとうだ……」

うんうん、信じてくれますねー軽々と。

……詐欺とか気をつけさせないとな。これから。
「よーし、これで秘密共有だ！」

「えへへ。じゃ、ゆびきりしょ」

「わかったよ」

「ゆーびきーりげーんまーん、うつそついたらー」

音姉は楽しそうに歌いながら絡めた指を少々振る。

「はりいちまんぼーんのーます」

あ、間違えて針一万本って言っちゃった。

「「ゆーびきった」」

よかった、音姉は笑ってくれている。

大切な約束。

子供らしい約束だけど、忘れることのない大切な約束。

大切な約束（後書き）

なんか急展開だなこんどの話。

まあまあ、分かればよしというわけで。

感想、ご意見お待ちしておりまーすっ
♪

なんか、もう。朝しんどい。(前書き)

ほぼ毎日更新してる……そんな自分が逆に引くぜ。

なんか、もう。朝しんどい。

朝倉家に住んで、時はどんどん進んでいった。

その時に変わったことといえば、俺と義之が隣の芳乃家に住んだこととか、音姉がブラコン……ではなく、世話したがりになって由夢がツンデレ……ではなく、ええと、かったるい星人になったり。

幼い頃は楽しかった。

まあ、子供の遊びは自分の心に響くものが多かったが……楽しかった。

てなわけで、ただいま14歳実年齢の方20超えちゃった　なお年頃になったと。

学園は……どこだっけ。熱血学園だっけ。

そんなく〇おくんみたいなのは行かないよ！

そうそう。さくらさんが学園長の風見学園だ。

そういや、俺よ。

……ここ、どこだ？

えっーと、なんかさっきまで暗かったから分からなかったけどどうやら夢の世界みたいだ。

ロマンチックの欠片もない上も下も分からない。

あ、なんか明るくなってきた。

モワモワーン……。あ、ここ俺の部屋だ。

「あれ、音姉？　由夢？　なんでいんの？」

え、なにこの嬉しすぎるシチュエーション。

なんで二人、俺のベットに……とかはどうでもいい。

なんか分からんが、現実か夢なのかも分からん。
でも……どうでもいい！　ちょー嬉しいからっ！

「おはよー弟くん。朝だよー」

「兄さん、朝ですよ。起きてください」

「え、ちょ、起きてんだけど。あ、あれ動けん……」

甘い香りと甘い声。微かにかかる吐息と柔らかな感触。

あ、そか。天国か。ここ、天国か。

え、俺死んだの？　なんで？

なんか分からないが、おいしいシチュエーションなことは確かだ。

「ほらあ、起きないと大変だよー」

音姫さん、すでに大変ですよ。

動けねえ~~~~~！　なんとか手を出してみる。

「あん」

……あん？　なにこの柔らかいスイッチ。

「もう、兄さん。寝ぼけてないでちゃんと起きてよ」

いて、頬をつねったな！？

親父にもつねられたことないのにつ！

「……二人とも、なにしてるんだ？」

「なにしてるって……ねえ？」

「うん。先に目が覚めたから（以下省略）」

夢？　夢だよな？　これ。

夢ですよ、うん夢だ。ってことは……。

「……いいのですか神様」

うおっほおい！

超、イイ！！

今の俺は不敵……いや、無敵！

たとえとしたり、マ○オカートで永遠無敵無双と同じ！！

いや、まで。

そっだ。俺は神だッ！

新世界の神だッ！

夢ならば恐いものなどなああいい！
それでは、ゴチになるっす。

「いただきま——」「音夢ちゃん直伝」 辞典落としの術！
「すごばああ！？」

ああああ……音姉と由夢が遠ざかっていくうう……。
待って、待っておいでかないれえ。
……がくっ

「グッモ〜ニン」 悠斗くん！

「サ、サクラサン……」

チヨンチヨンと、可愛らしいひな鳥の声が聞こえる。
いい天気だ。

こんな日はこたつに入るに限るな。
よし。

「あ、朝飯作らなきゃいけないんで下に下りますね……」

「ちよつと待った悠斗くん？」

「うぐっ」

しまるっ！ 首、しまるっ！

「ボクになにか言うことはないかなあ」

怖い。なんか、怒ってる。

「えっと……おはようございました？」

「ちよつとおかしい日本語だけど、まあいいや。でも、その前に
さくらさんの目が猫のようにキラツと光る。

いや猫じゃない。獣だ。

「ずいぶんと、いい夢見たようだねうんうん」

「……え、ええ。とてもいい夢でした」

「うんうん光栄光栄」

ん、なんで俺怒られてんのか分からなくなってきた。

「と、いうかさくらさん。俺の腹部に落ちてあった分厚い辞典は…

…」

「目覚ましだよ」

「はは、は……そ、そうですか……」

こんなので毎日起こされたら腹えぐれるわっ！

「音姫ちゃんと由夢ちゃんの夢だもんね。そりゃ嬉しいよねえ」

こ、恐い！

「ていうかなんでそれをつ！？」

「だってボクが悠斗くんを起こしに行ったら、いきなり音姉……だの、由夢……だの、寝言言っちゃってさ。しかも幸せそーな顔してるんだよ？ だからボク、ついその本棚に手が滑っちゃって……」

てへ、ごめんね といった顔をするさくらさん。

ペ○ちゃん並に恐かった。

「そりゃあ、ボクは魅力ないしさ。ボクが夢に出ても嬉しくなんて全然ないだろうけど……」

「そ、そんなことないすよっ」

「ふーんだ、そんなことあるくせにいー」

なんかもう、自虐的になってきてるよさくらさん……。

「あーもうっ！確かに音姉と由夢は魅力的です！ でもさくらさんもそれに負けないくらい魅力的な女性なんですよッ！？」

「にやう！？」

ボツと火のついたようにさくらさんが赤くなった。

……っか、なに口走ってんだ俺！

大声で恥ずかしすぎんだろ！

「え、えと、だからですね……って」

ふと目覚まし時計をみる。 12月16日（木） AM 4:12
分……。

「……早すぎだろ起きるの」

「あうあう」

さくらさんはまだなんか唸ってる。

仕方ない、二度寝しよう。

「あうあうって、はっ!! なんでまた寝てるの悠斗くん!」

「眠いからです。以下同文」

「お、起きてよう、ボクが起きてあげたんだからあ」

むく……とかけ布団被ったまま、起き上がった俺。

「じゃ、義之も起こしてくれたら交渉成立です。では」

「分かったよ!」

さくらさんは辞典を持ったまま、義之の部屋に向かった。

だいぶ、気に入ったようだな辞典。

俺は、軽く義之を犠牲にかけつつ二度の眠りに入った。

「悠斗、お前俺を犠牲にしたな!」

5時ちよつとくらいか今。

まあ、俺はとりあえず目が覚めたので台所でレツクツキングを
してた。

「おはよさん、牛乳いるか?」

「ああ、ホットで頼む。……ってそうじゃなくてええ!」

「カルシウム足りてないぞ、義之。ほら、煮干にほしもやるよ」

「牛乳に煮干にほしごとですとっ!? 見た目が悪すぎるんだがっ!」

「なに言っただ、義之。さんま入れんぞ」

「牛乳の中灰色でカオスになるからやめてくれっ!」

「……ちっ」

「舌打ちしたよねえ!? 今、舌打ちしたよねえ!? 聞こえるよ

うに舌打ちすんのやめてくれるっ!？」

義之との朝コントを終えて、ハムとトーストを作る。

朝の定番だ。コントもな。

「うーん、いい香り。デリシヤス♪」

さくらさんも降りてきた。

「さくらさんのおかげでもう、腹が鍛えられましたよええ」

「悠斗くんのおかげで、仕事のストレスが片付けられるよ♪」

「俺は何もしてないのに巻き込まれたんですが、お二人さん」

「あ、いたのか義之」

「義之くんおつはよー♪」

「……もう、いいです」

がくつとする義之。いい眺めだ。

「さすがに音姉たち、まだ来ないよな」

「そりゃあな、こんな早起きしたんじゃ」

義之と俺でじつとさくらさんを見つめる。

「にははー、早起きはなんちゃらの得だよっ!」

「三文の得ですよさくらさん」

「三文の徳じゃなかったか？ 悠斗」

「とにかくいいのっ、過去はもう見ないのっ!」

「振り返ることも大切だと思いますが」

「こらそこっ! 反論しないっ!」

俺はさくらさんに指さされた。

まあ、普段通りの朝だ。

『ピンポン』

「おじゃましまーす」

「おじゃまします」

「あ、音姫ちゃん、由夢ちゃん。いらっしゃい!」

「おはようございますさくらさん」

「おはようございます」

どうやら二人が来たみたいだ。

さて、とさくらさんはそろそろ家出んのかな。

「じゃ、ボクは一足先に行くからね」。鍵閉めよろしくつ」

「……いつてらっしやい」「」「」

相変わらず、忙しい人ださくらさんは。

「早かったな音姉たち」

「おはよう、弟くん」

「兄さん達……珍しく早起きですね」

「おつす」

ちなみに弟くんとは俺のことで、音姉は義之のことは普通に義之くんと呼んでる。

二人とも、弟みたいなもんなのに。

ふんでもって、由夢は俺のことは兄さんで義之は義之兄さんと呼んでる。

義之兄さんってなんかNHKの番組のお兄さんみたいな感じだな。

『よしゆきにいさんでえいす』とか言ってるぞ。

「朝飯食ってくか？」

「うん、いただくよ弟くん！」

「お腹すきました」

「はいはい、じゃ手伝ってくれ由夢」

「や、かつたるいです」

即答かよっ！てか、純一さんと一緒だなおい！

「あ、そっかいや純一さんは？」

「一人で食べてますよ」

「え、なんで連れてこないの？」

「かつたるいっておじいちゃんが言うの」

「そっか、純一さんだもんな」

なんか納得。すんごい納得。

「学校行くのめんどくさいなあ。なつ、悠斗？」

「こらっ義之くん。そんなこと言わないの」

「そうだよなあー」

「弟くんも同意しないっ！」

「無理だよお姉ちゃん。二人だもん」

「そうだけとお……」

そこで迷うんですか音姫さんよ。

「いつ弟くんがぐれちゃうか、心配で……」

「おいおいおいおい！ 俺がいつぐれた！？」

「手遅れだよ、お姉ちゃん」

「ちよ、そんなことないって！ 俺家族思いだって！」

「そうだよねえー」

「音姉も同意しないっ！」

なんか、俺達似ているよな。

俺と義之、音姉と由夢。

「ははっ、俺達って似てるよないろんな意味で」

義之も俺と同じことを考えてたらしく、義之が言った。

「確かにね。意外と私達本物の兄弟姉妹だったりして」

「そんなわけないよお姉ちゃん。……少なくとも、兄さんとは」

「うおおい！？ 俺だけ仲間はずれですかっ！」

「そうだよな。弟くんと血繋がってたらいろいろと問題だもんね」

「そんなに嫌なのっ！？ 俺と血繋がってたらそんなに拒絶するものなの！？」

なんか可哀想すぎるだろっ俺！

今まで生きてた中で一番ショックだよ！

「だって……繋がってたら、困るし」

ん、だって……なに？ 最後の方聞こえなかったぞ？

「うん……他の子が有利になっちゃうからね」

いやだからっ！ さっきからなにばそぼ言ってるの！？

そんなにこそそ俺を虐めるのが好きなのっ！？

「ドS！？ドS姉妹！？」

「悠斗……お前、恵まれてんなあ」

「はあ！？ この状況見てどうしてそうなる！」

「お前、まさか俺が虐められるのが恍惚だとしても言いたいのかこんにやるー！」

「……って音姉！ 時間！」

「……あっ」

喋ってたらいつの間にか1時間どころか2時間経っていた。
朝飯に二時間かけて食っていたということが。

「あー、時間だ。行かないとな」

義之は残りのご飯全部ほつぺたん中入れて着替えに行った。

「だいぶしゃべってましたね、私達」

「だいぶねちねちといたぶってくださいましたね、音姫さん由夢さん」
まだ復活しそうにない、俺の心。

「早く行くよー弟くん、義之くん」

「置いていきますよ」

「じゃ、昼休みまで授業は寝ておくか！」

なんか、もう。朝しんどい。（後書き）

悠斗と義之はなんとなくいいコンビって感じ。

義之がさわやかヤクザなら悠斗はやさしいヤクザなので（笑）

俺達の行方は？どーなの？（前書き）

人数が多くなってくると大変になってくるなあー。
と、いうわけで今回。クリパのお話です。
さあ、みんなで！クリクリクリパー！！

俺達の行方は？どーなんの？

「皆さんもご存知の通り、来週の23日から25日までの三日間、ただいまLHR真^さ最中。

前には委員長のち、沢井^{さわい}麻耶^{まや}が立っている。

しかもだいぶお怒りのようでねえ。最近の若者は短気なこった。

「我が校でクリスマスパーティーが開催されます」

クリスマスパーティー……略してクリパは、そのままんに、クリスマスを祝う文化祭のようなものだ。

しかし、この学校の祭り好きは異常なものであり、さすがの俺もクリパなんて初めて聞いた。

まあ、学園長がさくらさんじゃなあ。なんか納得なものだ。

「クリスマスパーティーですが、言ってしまうえば文化祭と変わリません。各クラスでの催し物が義務付けられています」

「わあああ……」

近くの席で大きなあくびを出したのはもちろん、義之。

そんなとこ委員長に見られたら殺されるぞ。

「しかあし！」

——バン！と何回も聞いた机の音が聞こえた。

「うわっ、ビックリした」

あくび途中な義之は今にも口から心臓がでてきそうだった。

「残念なことに、私達のクラスの出し物は未だ何も決まっておりますん！」

今日って12月16日だよな？やばいんじゃないの？

「この議題、LHRで11月からしてるのにもかかわらず」

「桜内、桜内」

義之に杉並^{すぎなみ}という男が声をかける。

「今日の委員長はいつにも増して殺気だっている。居眠りしているとそのまま永眠されるぞ」

ちなみに、この男。学園一のトラブルメーカーであり、杉山にそっくりだ。

そう。俺がこの学園に入ったとき、杉山に会った。
あいつ、なんともこのそっくりな杉並という男のところに住んでいるらしい。

しかもあいつもこの世界に来て子供から人生を送っていたらしいのだ。

で、その杉山は……

「どうした、神田。僕をそんなに忌まわしそうに見つめて」

「なんで、お前も同じ組になったんだよ……」

最悪だ。最悪だ。もうモルモットにされることがないよう祈るしかない。

「ところで神田。実は前々から作っていたものがやっと完成したのだが……」

「断るッ！」

「む、我が弟よ。あれは完成できたのか？」

杉並は今度は俺達の話に入ってきた。

この二人、見た目が似ているので杉兄弟と呼ばれている。

杉並の髪型を左右反転したのが杉山みたいなものだ。

まあ、元々杉山は目の色がルビー色なのですぐ分かるが。

「おいおい、三人とも。いいんちよーが見てんぞ」

今話しかけたのは板橋^{いたはし}渉^{わたる}。

こいつ、真の変態であり、真のバカである。

「ふあああああ……やっべあくび止まんね。悠斗どうしよう?」

「義之……さては、今日も夜更かししたな?」

「うぐっ」

つーか、さつきからどーんどん委員長の血管が浮かび上がって……きてるな。

「マツチ棒かなんかで瞼押さえとけ」

渉が義之にいたずらな顔で言う。

「マツチ棒もってない……」

「じゃー、ほら、シャーペン」

「30センチものさしもあるぞ」

俺もつい、30センチものさしを勧めてしまった。

「二人とも、俺の眼球をグロテスクにするつもりかッ！」

「その辺の描写は18禁だな」

「杉並は要所要所に話さなくていいよ！」

「では、桜内よ。マジックで僕流に目を書いてやろう」

「断るッ！」

うんうん今日も義之はいじりがいがあって最高だ。

「ちよつと、その悪の根源5人組！」

委員長がこちらをにらんでいる。こえー。

「な、なんだよう。いいんちよー悪の根源って」

渉が精一杯涙を出す。正直、きもい。

「神田、桜内、板橋、杉並、杉山の5人よ！」

「あれ、俺も入ってんの？」

俺はまだまともな人間だと思っていたのだが…… what?

「特に神田ッ！ あんたがリーダー的存在なのよっ！」

「な、なんだってええええええー！？」

い、いつのまにこんなジョーオも驚く愉快な変人達のリーダーにつ！？

「ちゃんと会議に参加しないと、あんたたちに決めてもらっからね」

「そ、そんな……俺……」

「悠斗……大丈夫だ。俺もいる」

「よ、義之……！」

「悠斗……！」

俺達は拳をあわせ、感動のシーンを始めてみる。

クラス中の女子達がキャーキャー騒ぎ始めた。

「静かにッ！」

委員長は俺達に抑えられない怒りをぶつけたまま、大声で静めよ

うとする。

……苦労してんなあ委員長。

「今、決まらないなら放課後決まるまで残ってもらうけど、それでいい？」

ざわついていた教室がまるで誰もいないのかというように静まり返る。

「クリパの出し物……永遠の謎だ」

クラス中が真剣に考えた。

それを見た委員長は呆れていた。

「あんたたち……どんだけ素直なのよ」

しかし、こうなった上俺もすっかり考えなければ。

「……人形劇」

ぼそり、といった声にクラス中が注目した。

……杏か、雪村ゆきむら 杏あんず。

毒舌少女……そして雪月花せつげっか3人組みの一人。

雪月花の雪は雪村の雪からきている。

「人形劇はどうかしら？」

人形劇ねえ……たしか、杏は演劇部だったな。

「せっかくクリスマスなんだし、ファンタジーっぽい出し物なら文句ないでしょ？」

「……なるほど」

いい案を聞いた、とばかりに委員長が関心する。

そして義之の前の席の女性が手を挙げた。

「はい。私も人形劇がいいと思いますーす」

彼女は花咲はなさき 茜あかね。

雪月花3人組の一人であり、ポジティブはエロ担当。

雪月花の花は花咲の花からきている。

「クリスマスだし。こう、ロマンチックなものがいいんじゃないかなあー？聖なる夜を盛り上げるラブロマンスとかあー」

クネクネと、茜が男子生徒に色気を振りまく。

これにひつかかるのは残念な男子と涉だけだ。

「俺も賛成だー」

ほらな、涉も賛成した。

「ついでに提案なんだけど……人形劇のヒロイン役は小恋……なん
てどうかしら？」

「ふええ!？」

ガッターンと爽快な音が教室内に響き渡る。

このドジっ子ぷりは……月島つきしま 小恋こいだ。

雪月花の一人……なんか、もうこの説明しんどくなってきたぞ。

とりあえず、杏と茜と小恋は仲良しってわけさ。

そんでもって俺ら5人組みとも仲がいい。

悪巧みチームってなわけ。

おかげで生徒会は大変忙しい。

音姉が生徒会長なので、いつも同情するよ。

「あい……たたたた」

「すごいな、小恋。お前、よし〇と新喜劇に出れるんじゃないか？」

「そんなこと言われても嬉しくないよ悠斗お」

涙目でにらまれる。でもそれくらいあざとらしいこけかただった。

「わ、私がヒロインって……」

ちなみに彼女は俺と義之の小学校からの幼馴染。

これで8人組だ。人数は多い分、いたずらも多い。

「あの……あの……あの」

うるたえる小恋。小動物のように見える。

小恋は俺達8人組みで一番のまとも人だ。

それでもこの輪の中に入っているのは、杏と茜に巻き込まれるか
らだ。

ちよいと気の毒。

「ヒロインなんて、そんなのできないよ」

あわあわとあわめく小恋。

しかし本人以外は決定だな、といった顔をしていた。

…… 本人以外な。

「大丈夫」

杏はなにか確信している。なにが、大丈夫なんだか。

「何を根拠にそんなあ」

「俺も小恋なら大丈夫だと思うぞ」

「よ、義之まで」

「ラブロマンスにするなら、相手が必要ね」

「はいはいはーいつ！」

「…… なに、板橋」

「相手役は俺、なりたいです！」

むっふーんと渉が鼻息まじりに興奮しながら言っ。

絶対こいつ、小恋目当てだ。

「却下」

「が、がびーんっ！」

すぐに杏が却下する。ま、当然わな。

「相手役は義之で決定というわけで」

にやり、と杏は獲物を狙う鷹のように微笑む。

「ふええ！？」

「はえ？」

小恋の驚いた声が響く。あと、義之は今の流れ全く聞いてなかった。

「そうだねえ、義之くんっていい声してるし演技も上手いもんね」

茜は思い出したかのように言う。あ、そっかや義之。仮病で学校を休んだとき、本格的な芝居で仮病してたときもあったな。

「義之が無理だったら悠斗にやらせるし」

「はあ！？ 俺、そんなの無理だからな！」

このロリ少女！俺はプレッシャーに弱いんだぞ！

よく昔から舞台とかで緊張しすぎて噛むから俺！

そのせいで、『噛んだ悠斗』とも呼ばれたこともあるんだぞっ！

「大丈夫よ悠斗。義之が断るはずないもの」

キラリ……杏が義之を狙う。

……そっか、強制だもんな。なら、大丈夫か。

「ちよつと待て！ 何の話！？ まったく状況がつかめない！」

「だーかーらー、人形劇のヒロインの相手は義之にするって話だったの」

「はいいいい！？ 聞いてないよ！」

「そりや義之聞く気ねえーもん」

「そうだけとおお」

「まったく、後で音姉に勉強するフリしてゲームしてたの報告だな」

「ごめんなさあああい！ それだけは……それだけはあああ！」

「ちよつと桜内！ うるさいわよ！」

「すまん、委員長。音姉にバレることだけは避けなきゃいけないんだよおお」

涙を流す義之。ま、音姉は怒ると恐いからな。

「なんだったら、義之のベットの下のにあるアレを……」

「わああああ！！ 言うな、言うなそれをおお！」

「いいこと聞いたわね、茜」

「そうだねー、今度義之くんの家に遊びに行かなきゃねー！」

「ふーん、義之。そんなの隠してるんだあ……」

「そこの雪月花よ！ 誤解だ！ もしくは陰謀だあああ！」

くくくく……さすが義之。いじりがいがあるまくる。

「つて、あれ。杉兄弟は？」

男子A「なんか、UMAが俺達を待っている！ つて出て行ったぞ」

「……あほだな、あいつら」

ま、委員長には言わないでおくか。

これ以上委員長が怒ると、やばいからな。

「……………」

「な、なんだ涉。ずっと黙って……」

なんか陰しい顔をしていた。

なんか、きめえ。

「悠斗……ずっと俺思ってたんだ」

「なんなんだ、一体」

ギヤーギヤー義之たちが騒いでる中、渉はずっと何も言わなかった。

「俺……影薄い？」

「うん薄い」

また一つ。つまらぬ心を斬ってしまった……。

「うわああああん！ ゆうとくんのバカァー！ よしゆきくんのバカァァー！」

「ちょ、板橋！ 勝手に教室出て行かないでよ！」

「急にどうしたんだ渉！？」

とりうえずまあ……俺達のクラスは騒がしいです。

「じゃ、人形劇決定というわけで♪」

「ほ、ほんとにやるの？ 杏……茜……」

「当たり前でしょ、小恋。私達で勝手に決めたんだから」

「うーん、今年もおもしろくなりそうだねえー♪」

……人形劇ねえ。

ま、かつたるいがとりあえず頑張るとしますかね。

俺達の行方は？どーなの？（後書き）

長かった。

しかも人形劇ルート。

ちなみに作者はSSPルートが一番好きです。
ヒロインはともかく、なんか楽しいから。

義之がバカだった件

このスレは1000を超えました。

(前書き)

P S P.....(涙)

義之がバカだった件

このスレは1000を超えました。

「さてつと。学園長室に向かいますかね」

別に怒られるわけじゃない。

ただ、さくらさんに届け物があつたからだ。

「つたく、大事な書類とか忘れるなよ」

ほんと、いつも頼りになる大人なくせにどっか抜けてるところあるんだから。

「一応ノックつと」

返事なし。あ、でも中から『あん！』と可愛い声が聞こえてきた。

もちろん犬の鳴き声だぞ？ けっしていやらしいものなど――
|。

「とりあえず入りますよ、さくらさん」

ふむ、やっぱり本人はいない。

「あんあん！」

「おつす、はりまお。さくらさんはいないのか？」

「あん！」

「そうかそうか」

ん？ 今俺犬と通じあわなかったか？

こいつははりまお。

犬のような生き物で学園長室に住みついている。

と、いうか犬なのかこれ。

飼い主は「犬だよ」と語ってたが……。

「うーん、さくらさんが帰ってくるまでここにいさせてもらうか」
「くーん」

はりまおが物欲しそうに俺を見つめる。

でも、俺は魔法をつかえない。
なので。

「ほれ、和菓子」

秘密で学校に持ってきたものをはりまおにやった。

「あん！」

おいしそうに食らいつくはりまお。

俺も大福を口の中に入れた。

うんうまい。

「今日はたまたま持ってきてただけだから、次は義之にでももらいな」

憎たらしいことに、義之も魔法が使える。

とはいっても、和菓子を手から出すくらいだが。

純一さんに教えてもらったらいい。

俺も後で純一さんに教えてもらったが一つもできなかった。

「しかし、学園長室も変わったもんだ……」

「あん？」

和室にこたつ。恐らくさくらさんの趣味だろう。

「んー、なかなか来ないし帰ろっかなー？」

と、俺が考えてたときに。

「はろはろー」 はりまお、いいこにしてた？ って、悠斗くん？

……我が風見学園学園長がお帰りになさったようだな。

「おじゃましてます」

「わーい、悠斗くん！ 来てくれてたんだあ！」

さくらさんの方がはりまおよりよっぽど犬っぽい。

いや、さくらさんは猫か。

「つてぐほお！？ 腹が！？」

いきなりさくらさんは俺に飛びついて来た。

……しかも、腹部にみっちりダイレクトアタック。

「うーん、悠斗くんあたたかいー」

「なにしてるんですか、さくらさん！？」

「じゅうでんー」

「……はあ」

もう、ため息つくしかねえーわ。

「充電完了！ サンクス悠斗くん」

「くぁー、腹がみしみし言うてる……」

「あ、はりまお。悠斗くんにお菓子もらったの？」

「あん！」

「えー？ ごめんね、悠斗くん」

「別にいいですよ、こいつが太れば」

「あん！？」

「にははは、はりまおが太ったところ見てみたいね」

「あんあん！？」

はりまおがあわあわしだした。

でもこんなちっこい奴が太ったところ想像すると……ぶふッ

「くぅーん……」

人間で言ったらダイエットで悩む女性みたいな心情なんだろうな
はりまお。

「で、さくらさん。これ置いて行つてたでしょ？」

いい加減本題に入る。

じゃないと次の授業に遅れるからだ。

「あー！ ありがとう！ ボク、困つてたんだあ。助かったよ悠
斗くん！」

「どういたしまして。じゅ、俺戻りますね」

「え、もう帰るの？」

「授業がはじまるので」

「えー？ 授業くらいいいじゃん」

学園長なくせに、とんでもないことを言う。

「先生に怒られますって」

「悠斗くんを怒る先生がいたら、ボクがクビにするよ」

「職権乱用だー！？」

「にははは、やっぱダメか。じゃがんばって授業受けてきてね」
「はいはい」

「はりまおもお見送りして」

「あん！」

はりまおがとことこ俺の前にやってきた。
癒されるなあ。

「それじゃ俺はここで」

「うん！　ありがとうね」

俺は学園長室を後にした。

「んー、食った食った」

昼飯を終え、教室で次の授業に備える。

「次は全校集会だぞ悠斗」

「ん？　そうだっけ」

渉に言われて次の予定表を見る。あ、ほんとだ。

「そついや、昼休み義之いなかったんだが……」

「義之はなんか、杉兄弟と一緒にどこか行ったよ」

「うわぁ……」

絶対なんかに巻き込まれてるな義之。

ご愁傷様。

「はぁぁぁぁぁぁ」

盛大なため息が教室内に行き渡る。

義之だ。

「義之おつかれさん、次全校集会らしいぞ」

「おお悠斗！　我が同士よ！」

「いやなに杉兄弟みたいなこと言ってるんだよ……」
頭おかしくなっちゃったのか義之。

あの二人についていったせいで……。

「たのむっ！ 昼食なんか残ってないか!？」

「残ってるわけないだろ、今日学食なんだから」

「そ、そんなあ」

精一杯涙を流しまくる義之。

あ、そうかい。こいつ、昼食べなかったんだな可哀相に。

義之の腹は限界に達したのか、ぎゅると情けない音をだす。

「あら、こんなところになぜか焼きそばパンが」

「（ぴくっ!）」

杏の声に義之が分かりやすく反応した。

「でも私はもうお腹いっぱい……さて、どうしたものか」

「（ぴくぴくっ!）」

義之の反応は携帯のバイブ並に震えていた。

おっと、机の上のものが落ちるぞ。

「杏からもらったらどうだ？」

「俺をみくびるなよ、雪村杏。神田悠斗」

「ん?」

「わたくしとて幼少から帝王学を仕込まれ、いずれは日本を背負って立つ男として育てられた身」

「え、お前バカなの？ 死ぬの?」

俺の第一声はこれしか思いつかなかった。

「そんなわたくしを、焼きそばパンくらいで挑発しようだんて片腹痛いわ。はっはっは!」

だめだこいつ。重症だ。

「犬とお呼びください」

「うおい!？」

さっきまでの変な自信はなんだったんだ!

「犬……」

「わん！」

なんとシユールな光景だ。

義之がおすわりをしたまま、へっへっと言っている。

「……お前、プライドってもんがないのか？」

おお！ 渉が正論を言った！ すげえ！ 義之犬化すげえ！

「バカヤロー！ プライドで腹は膨らまねえんだよ！ 資本主義なめんな！」

「資本主義は関係ないと思うが」

「すげえ！ 渉がちゃんとしたこと言ってるの初めて見た！」

「どういう意味だ悠斗！ 俺が馬鹿だとしても言いたいのか！？」

「ああ、馬鹿だ！」

「言い切った！」

「お手……」

「わん！（ポフッ）」

「おかわり……」

「ハフッ！」

なんか、他人の目から見てみたらなにしてんだこいつら？ みたいな感じだろうな。

「待て……」

「ハッハッハッ！」

「っーか、渉。全校集会は……」

「ふーんだ！ ゆうとくんのバカ！」

「うわキモッ！」

「うわヒドッ！」

「おまわり……」

「フウフッ！」

「だいたい悠斗は俺のことなにしてんのか！？」

「へ？ ……ミジンコ？」

「微生物うううううー！」

「ちんちん」

……まで。

「うぐっ」

……いま、この娘は何を言った？

「ほらあ、ち・ん・ち・ん」

教室が今の声で騒がしかったのが一気に静まった。

「う、うぐおおおお！」

このおかげで渉は地面に、くの字に曲がっている。

「も、もお、杏。だめだよ」

顔を真っ赤に染めながら小恋が慌てて入ってきた。

「そうだよ杏ちゃん。ちんちんとか言っちゃダメ！」

あんたも言ってるよ。

「茜も言わないの！」

「えゝ？ なんて？」

お、始まったぞ小恋いじり。

「だからちん——」

みんなが一気に小恋の方へと向いた。

「はあ、はあ、はあ……」

「ゴッドフィンガー！」

「ぐはあああああ！」

変態をやっつけた！ 経験値が0.5上がった！

「悠斗！？ わ、渉が！」

義之が渉にかけよる。やさしいなあ義之。でもな？

「悪は滅びた。これで、終わったんだ」

「そうか……渉。骨は拾ってやるよ」

「いやまて義之。こいつはペット葬で十分だ」

「ごぼっ……まだ死んで、ないよ俺……ああ、死んだ婆ちゃんが見える……」

「そうだそのまま、婆ちゃんについていけ」

「おいおいおい！ 行くな渉！ 悠斗もなに人の死を手伝ってるんだ！？」

ピンポンーカンコーン……チャイムがなった。
↑（てきとう
だなオイ）

「うあああ焼きそばパン……」

「ふ、恵んであげるわ」

「どうせそれ、小恋のдарう？」

「ふえ？　なんで分かるの悠斗」

「なんとなくだよ」

こいつはやさしくていい奴だからな。

義之のために焼きソバパンも買っておいたのдарう。
「さて、と。体育館に行きますか」

義之がバカだった件

このスレは1000を超えました。(後書き)

今日は疲れてたのでここまで。

PSPが壊れた……ダカーポの更新がちょっとずつ遅れていくかもしれない。

最悪だああああー

音姉の良いところと考え直してほしいところ

見渡す限り、人、人、人……。

このくそ蒸し暑い中、体育館の中は全校生徒すし詰めといったところだった。

「今日はなんのための全校集会なんだ？」

さっさと終わらせて欲しい。かつたるい。

「くああ……クリパの連絡事項のことだろな」

俺の質問に対して涉があくびしながら答えた。

「もう来週だからな。杉兄弟はなんか企んでるんじゃないだろうな？」

義之がじと目で二人を見つめる。つーか、帰ってきてたのか二人とも。

「ふ、俺達が何もしないわけないだろう」

「今のところ企業秘密だ」

「でしようね……」

義之ははぁと深いため息をつく。

俺達は適当な話をしながら、全く連絡事項について耳を貸さなかった。

「先生方、ありがとうございます。次は、生徒会からの連絡です」

この透き通った力強い声は……

お、高坂まゆき先輩こうさかじゃん。

音姉の親友で生徒会副会長を務めてるまさに、体育会系な少女。見た目からして活発で、だれにでもフレンドリーな先輩だ。

「生徒会長の朝倉音姫さん。お願いします」

音姉の出番か。

全校生徒が、音姉がゆっくりとした動作で壇上に上がるのを注目した。

「それでは、私の方から連絡いたします」

ふむ、やっぱり普段の音姉とは全くの別人だ。

堂々とした態度、凜とした表情。そしてなにより……。

「例年通り12月23日から25日にかけての3日間、我が風見学園ではクリスマスパーティーを開催します」

このいつものふにやふにや感とは、かけ離れた完璧さだ。

普段いつも完璧なんだが、どっか抜けているんだよなあ……。

「一般の方へも公開を行うのが23日、24日の2日間。25日は学園関係者のみの後夜祭となります」

「（なあなあ、やっぱり音姫先輩っていいよな？　もう、たまんねえーよ！）」

「（わ、びつくりした。急に話しかけんなって）」

涉がなんか興奮まじりに俺に話しかけてきた。

なんなんだこいつは。

「（ルックス良し！　成績良し！　性格良し！）」

「（なんなんだそのどっかで聞いたフレーズは）」

「（優しくてしっかり者でそのうえ料理も上手い）」

「（いや、お前音姉の料理食ったことあったか？）」

「（それは想像でキープなんだよ！　お前みたいに手料理食えてるリア充氏ね！）」

「準備期間としまして、来週の月曜日から午後の授業時間を――

――
「（音姫先輩っていい匂いがするんだよなあ）。ゲヘ、ゲヘヘヘヘ）」

「（警察呼んでもいいか？）」

えーと、確か警察は……1・1・9……と。

「（やめてーっ！　俺を社会的に殺さないでえー！）」

「（あ……）」

惜しい。もう少しのところで携帯を盗まれた。

「（ぐすん。俺はお前達と違って遠くから眺めるしかねえんだよ）」

「（んなもん知らん。一生眺めてきなさい）」

「——とは言つても、授業の一環として行われる行事です。各人とも節度を持った行動を心がけるよう注意してください」

「（あー、俺も音姫先輩みたいなお姉ちゃんが欲しいよ。悠斗、それに義之も羨ましすぎんぞ！）」

「（別に音姉は本当の姉じゃないし……）」

「（ますますいいじゃんかよ！　ちくしょー！　俺も美人姉妹のいる家に居候してえなあ）」

渉がorz状態になる。おい他の奴ら見てんぞ。

「それではみなさん、楽しいクリスマスパーティーにしましょうね」
音姉はまるで不意打ちをかけるような笑顔になる。

あちらこちらからため息が聞こえた。……むさい男どもめ。

「（ああうう！　やつぱたまんねええええええ！）」

「（うるさいぞ渉！）」

渉だけでなく周りののむさい男らも声を上げた。

——ガッツ！

「（あだっ！？　だれだ今殴ったの！）」

「（お前はこれくらいされて同然なんだよ！）」

「（渉だな！？　後悔すんぞ！）」

「（ふんだ！　やれるもんならやってみる！）」

俺達の戦いは止められるまで続いた。

……実に無駄な戦いだった。

「あー、ほんとだるい……」

さっきの体育館の喧嘩の結果？もちろんフルボッコしましたがなにか？

「やっぱり懂れるよね音姫先輩」

全校集会が終わった今、いつもの8人グループは廊下をたらたら歩いていた。

「最高クラスのお姉さんって感じだよね」

雪月花はほんと仲がいいです。仲がいいのはいいことだけだな。

「うん。頼りがいがあるし優しいし綺麗だし」

さすが音姉。後輩にこんなにも慕われてるんだな。

「あ、噂をすればだね」

そこには、たくさんの生徒達に囲まれていた音姉の姿があった。

生徒A「会長っ！一般来場者に対する誘導と安全確保のための人員について——」

「その件に関しては明日の会議での議題とします。時間までにたたき台の作成をしてください」

生徒A「はい、わかりました。」

生徒B「音姫先輩、パーティー期間中の円滑な案内放送を行うため、放送部との——」

「あ、放送部の部長さんと話はつけてありますので、あとは現場サイドで打ち合わせを行ってください」

生徒B「了解です、音姫先輩」

生徒C「朝倉さん。お料理クラブ主催臨時食堂の食材についてです

けど」

「昨日、業者に発注を行いました。再来週の火曜には届く手はずになっています。詳しくはまゆきに確認してください」

生徒C「はい。高坂さんに確認します」

ふむ。さすが音姉。さっきから全然人が減らないぞ。

「すごいよね〜仕事をてきぱきとこなしていて……」

「そーだよなあ〜。なんつーか、完璧？ 理想？ 最恐？」

「いや、最後のはなんだ」

最恐って……まあ、音姉は怒ると確かに最恐だわな。

「全然気取ったところがないしね」

「うん。だれに対しても平等だしかつこいいな〜」

「ったく。羨ましすぎんぞ悠斗に義之！」

「へっ！？ ああ、音姉のことか。俺は大丈夫だぞ？」

さっきまで口を開かなかった義之が答える。って大丈夫って？？

「例外があるものね」

そしてこれまたさっきまで口を開かなかった杏が悪戯心に微笑む。

「例外って……俺？」

「悠斗しかない」

たしかに、例外は……あるな。

「あ——っ！ 弟君みつけえ！」

「うげっ」

音姉と目が合い、ぱつちりと目が開かれ、にっこりと音姉の表情が崩れた。

ああ〜……さっきまでの真剣な音姉はいずこへ……。

「えへへ〜」

あうーお願いだからそんな笑顔笑顔笑顔で、俺の前に立たないで

くれ。

勘違いされる。

作者「ふっ、なにを今更」

なんだ！？ 今、脳に電気信号が届いたぞ！？

……気のせいかな？

「あー、またボタン全部外してるー！ ダメって言ったでしょ」

「いいんだよ、ささやかな冒険なんだよ」

「ダメ。ちゃんとホックまで閉める！」

「うぐっ、ギブギブ。きついつて」

「ダメだよ？ しょうがないな」弟君は

なんなんだこの新婚さんの「ほら、ネクタイがまがってるよ。

ほんと私がいないとダメなんだから」みたいなシチュエーション。

ちよ、周りの奴らの視線が痛すぎるんだが！

生徒D「ちくしょう、あの野郎。なんて羨ましい。」

生徒E「ねえねえ、あのふたりってどんな関係なの？」

生徒F「噂では姉弟らしいけど。」

生徒E「えーっ！姉弟なの！なんかやばくない？」

生徒D「くうー！俺の音姫先輩をつー！」

駄目だこれは。すごい注目浴びてるよ俺達。

帰りたい……帰りたいよパトラッシュ……。

「せめてホック外していい？」

「ダメだよ。服装の乱れは心の乱れなんだよ！」

「俺はいつも乱れてるから大丈夫だろ？」

「……そんなにイヤ？」

「！」

来ましたよこのウルウル目。だから、これは反則なんだって！生徒D「あいつ、音姫先輩を泣かせたな！」

「リア充は抹殺するべき！」

むさい男ども「そうだそうだー！」

あー、外野がうるさい！

後でてめえーら全員串焼きにすんぞ！

「ちよつと音姫―？ 仕事は―？」

おおまゆき先輩！ナイスです！！！

「てなわけで音姉ッ！ サラバだ！」

「あ、まゆき——って弟くん！逃げたー！」

「じゃー！ 仕事がんばれよー！」

「あうう。今日も晩御飯作りに行くからね！一緒にたべようね！」

「大声で爆弾投下しないでくれええええ！」

俺は走りながら泣いた。

……いつか刺されるんじゃないだろうか音姉ファンに。

音姉の良いところと考え直してほしいところ（後書き）

悠「どうも、みなさんこんにちわこんばんはおはようございます
！」

作「作者ことナツクとー」

悠「運の悪いと有名な主人公俺のー」

作・悠「裏舞台コーナー！」

悠「……誰得だよ」

作「このコーナーではD・C・？のいいところすなわち！」

悠「名曲一つ紹介するというくだらないコーナーです」

作「（くだらない……ずーん……）」

悠「なんでこんなものと思ったんでしょうねーでは一曲めー」

作「はやっ！ もうちょいトークしようよー！」

悠「うるさーい！ 読者様がしんどくなるだろーが！」

くあさきゆめみしきみと フル再生く

悠「いかがでしたでしょうか。D・C・？といえばこの名曲ー！」

作「いや文字だから再生しても意味ないよ!」

悠「そして作者がこの曲を歌ってみたら90点超えてやほーとか言
ってたそうで」

作「……いいじゃないかぐすん」

悠「それではみなさん次でお会いしましょー!」

作「ちょ、閉めるのはやいて!」

次回予告!

『俺の義妹がこんなに怖いわけがない』
それでは

俺の義妹がこんなに怖いわけがない（前書き）

サブタイトルは……由夢のことだよねうん。
なんつーか、恋愛とかって書いてるとどーしてもたじたじする。

俺の義妹がこんなに怖いわけがない

「やっとこさ学校も終わりですかい」

俺はだらしなく一人でぽつぽつと我が家に向かう。

見渡すと周りには、桜の木。

どこからどう見ても春の光景。

なのに景色と気温は違いすぎて参る。

「ううー、さみいー」

旗から見たら自分はおっさんみたいなんだろうな。

今日の気温は0度近いらしいし……。

こんな真冬でも桜の花見ができるというのが、この島のモットーだ。

……ま、そんな酔狂じみたことだれもしないけどな。

「ん？ あれは……」

校門近くまで歩いていくと、壁によりかかり暇そうにぼつりと立っている人影が一人。

「由夢か。あいつ、なにしてんだ？」

とりあえず俺はその人影に話しかけようと、歩くスピードを上げた。

「うつす。誰かと待ち合わせか？」

「え？」

人影……もとい、由夢はさっきまで俯いていた顔を上げ、俺の方に顔を向けた。

「あ、兄さん。奇遇だね」

「奇遇もなにも、そんなどこにいたら必ず会うでしょーが」

由夢はここにずっといたみたいで、寒そうだ。

「そんなことないよ。この世の中絶対はないんだよ」

「はいはい」

というか由夢は上着も着てないのか。寒いだろそれ。

「ところで兄さん。今、暇？」

「悪いが暇でない。サラバでござる！」

由夢の目的が分かってしまった。……それは、まさしく俺の財布！
このあと奴は『なんかおごってー』と言っに違いない！

「ちよつと待った！」

「ぐええ！？」

コートの首のところを掴まれ、首が絞まる。

「たまには兄さんと一緒に帰ろうかなって思ってたさ。……いいよね？」

「H A H A ワタシニポンゴワカリマテン……」

さらに首の絞まり具合は増加する。

「や、たまには兄さんと一緒に帰ろうかなって思ってたさ。……拒否
権ないから」

俺の顔は見えないが、恐らく真っ青だと思う。

「分かった。分かったから……離しておくれ……」

「……はい」

「ぐおお……」

首が超痛い。つか、息できん。

あれ？ もしかしてバットエンド？ これ、バットエンドなのか？
まさかの主人公死亡ですか？

じゃあスタッフロール見る前にクイックロードかぶち切りしなき
や……。

「大げさだなあ兄さん。人はそう簡単に死なないよ」

いや人だつてあつてなく死んじゃうよ！？

「……目的は、なんでござるか」

思わずござる語になってしまう。……思わず。

「おなかが空いたー」

「……やっぱそうきたか」

なんだこの大食いさんは。太んぞ。

「なかなか兄さんが来ないから結構待ったし」

いやそもそも待ち合わせした覚えがないんだが……。

「暇だし寒いし雪降りそうだし知らない男の子に声かけられるし、最悪だよ。だから責任とって」

「それほとんど俺関係ないだろ」

「あー、そんなこと言うんだあ。寒い中兄さんをずっと待ってたのにさ」

「目当ては俺じゃなくて財布……だろ？」

「むっ。……そうだよそれ以外に兄さんを待つ理由なんてないし」
「やっぱりね。でもなんか、さっきよりもちよつと不機嫌になったな。」

「兄さんのにも見返りとしてかわいい妹と一緒に帰ってあげるんだから安いもんでしょ？」

「はいはいそうだね」

「うわ、投げやりに返事された」

「かわいい妹ならその猫かぶりな性格を直しておきなさい。」

「つーかいいいのか？ 地が出てきてるぞ」

「う。だ、だれもないから平気だよ」

由夢は学校や公共の場では猫を被っている。

たらし性格を出すのは家族が自宅のみだ。

「それより兄さんーおなかすいたー」

「分かった分かった。なにを食べるんだ？」

「クレープ♪」

クレープねえ……まったく、俺も甘いな。

仕方ないなあ最近金欠だというのに。

「それじゃいこつか兄さん♪」

「ちよつと待て。寒いだろ？ 俺の上着貸すから着ときな」

そう言っただけ俺は自分のコートを脱ぎ由夢にそつと掛ける。

「あ……。あ、ありがとう兄さん……」

顔真っ赤になるほど寒かったのか？ まったく。

「桜公園だな。行こうか。俺も甘いもの好きだし」

由夢に近づき由夢の手をとる。

手、冷たいな……。どんだけクレープ食べたかったんだよ。言ってくるいや俺が買いにいくというのに。

「う、うん……」

さつきから由夢の顔は茹でたこみだいになっている。

恥ずかしいのか、由夢は下を向いてしまった。

ま、たまにはこういうのも悪くないかな。

な、なんかこれってデートみたいだなあ……。

さつきからすごくドキドキしてるよ……。うう。

それに、兄さんはいつも優しい。

兄さんも寒いと思うのに、私にコートまで貸してくれて……。

それに冷たくなった手も握ってくれた。

……。じ、自分でも顔が赤くなっているのが分かるよ。

「うまいなあ」、甘いものはなんでもうまいんだろー！」

でも兄さんは私とは違って全く意識してないみたい。……鈍感。

「あ、由夢のもうまそうだな。いただきっ」

ほんと、いろんな女の子に囲まれてるくせに何も気づかないし……
って。

「あ——っ！ 私のストレベリーアイスクレープ！」

「もぐもぐ……よそ見してっからいけないんだよーだ」

うー！ た、食べ物への恨みは怖いのに！ 知らないよ！？

「ほら、俺のもやるから」

笑顔で私にクレープをさしだす兄さん。……なんか本格的なデザートみたいになってきてるよ。

「ん？ いらないのか？」

むかつくなあなんにも意識してないなんて。

「はぐっ」

「あ——っ！ 俺のフレッシュラズベリークレープ！」

「もぐもぐ……気づかないからいけないんだよーだ」

「き、気づかない？ なにが？ っていうか全部食ったな！？」

うーんおいしー」

「お、俺のフレッシュなんちゃらクレープ……むごい……」

ほぼ無くなってしまったクレープを兄さんは涙を流しながら食べていた。

なんか可愛い。

「おいしかったー」 、「ごちそうさま」

「うふう……俺のクレープよさらば……」

さすがに全部食べるのは可哀想かなーとか思ったけど、兄さんには当然のことだね。

「はやく帰らないと夕食だよー」

「えっ……食べれるのか？」

「甘いものは別腹ですから」

それに私は太らない体質ですしね。

クレープも食べ終わり兄さんとまた手を繋いで家に向かっていく。
薄暗い桜並木。

この光景……もしかして。

「子供って元気だよなあ」

兄さんに急に言われたから私も、キャツキャツと遊んでいる子供達に視線を向けた。

「私達も昔あんな風に遊んだよね」

「あの頃は由夢が素直で可愛かったなあ」

「む、今の私は素直じゃないと言いたいんですか」

確かに私は昔とは違うけどさ……。

「デレないツンデレ的な？」

「どういう意味ですかっ！ってあ……」

「ん？ どした？」

急いで鞆からメモ帳を取り出す。

今ここにいる光景は、私の見た夢とそっくりだった。

私の見る夢……それは、予知夢。

幼い頃からなぜか見ているこの特殊な夢は、まず外れることが無い。

だからこのメモ帳に見た夢のことをメモする。

……もしかしたら、変えられるかもしれないから。

でも、何回もチャレンジしてみたけど、一度も変えられなかった。

「どうした由夢？ 用事か？」

「いえ、そんなことはないんですけど……あつた」

メモには、『桜公園で兄さんの頭にボールがぶつかる』と書かれている。

「いけない！ 兄さん危な——」

もう遅い。すぐに振り返るとボールがすぐそこまできていた。

思わず、目を瞑る。

——バシッ

「あぶね。ボール当たるところだった」

「あ、れ……？」

当たってない……？ どうして？ 今まで、そんなこと一度もな

かったのに。

「すみませーん！ ボールきてませんかー」

「おー、これだろ？ ほらボール」

「ありがとうございます！」

やんちゃそうな子供はお礼を言ったあと仲間のもとへと戻った。

「兄さんボールがくることなんで分かったの！？」

「ふへ？ んー、なんとなく？」

そんな理由で……私の予知夢が外れたって……。

「つーか、由夢こそなんで分かったんだ？」

「へー？ そ、それは……」

夢で見たからですーとか、言えない。

いくら兄さんでも何いつてんのこの子？ みたいな視線になるのは目に見えている。

「ま、いいか。早く帰らないと音姉心配するな」

「そ、そうだね！ 早く帰ろう！」

でも、初めて私の夢が外れた……

もしかすると、あの時見た最悪の夢も逃れることができるかもしれない。

あれだけは、避けなければいけない。

……兄さんが苦しむのは、見たくないから。

俺の義妹がこんなに怖いわけがない（後書き）

悠斗「ほんと、このコーナーなんの意味が……」

作者「いいじゃないか！ さあ今回の曲はこちら！」

くサクラキミニエム フル再生く

悠斗「文字だから音楽は聴けないけどそこは想像でカバーしてくれ」

作者「この曲は作者もお気に入りの曲ですね！ アニメ自体は……
まあ、いいんじゃないかな」

悠斗「でも作者だつてアニメからD・C・？始めたんだろ」

作者「二期はやばかったね……初見の自分にとって涙涙だった」

悠斗「しかし結構前のアニメだよな……なんで今更」

作者「ではタイトルコールいきましょう！」

悠斗「無視か！」

次回、『家族の団欒は大切だぞ！』それではく

家族の団樂は大切だぞ！（前書き）

ふうー、今回ちょっと時間かかったかも。

家族の団樂は大切だぞ！

部屋中にいい香りが漂う。

グツグツと鍋がリズム美しくなり響く。

……そう。

ただいま、晩御飯の作っているところなのだ。

「弟くん、みりん取って？」

「あいよ」

俺と音姉は台所に立ち二人で料理している。

たまに二人でするときもあるのだ。

「んゝ、もう一味かな？」

「じゃ……はい、醤油」

「ありがと」

ぱかっとな煮物の鍋を開ける。

うむ美味しそうだ。

音姉がそのまま醤油を適量に入れ、おたまですくい味見をした。

「うん。いい感じ、いい感じ」

「お、どんな感じ？」

「はい、弟くん。どうかかな？」

そのまま音姉が俺の口元までおたまを運んだ。

「いや……どうかなくて……」

「はい、あゝん」

「あゝんってちょ、音姉エ……」

さすがの俺もあゝんは恥ずかしいといつかなんとやら……。

「はゝやゝくうゝ」

「わ、分かった分かった」

仕方ないのでずっと煮汁をすする。

口の中にしつかりと濃く味付けされた……それでいて柔らかい味が広がる。

「んー、美味い！」

「よし、完成！」

コンロの火を止めて音姉がにっこりと微笑む。

ちよつと可愛いなとか思ってみたり。

だって男の子だもん！

「お魚はどう？」

「こつちもいい感じに焼けてるよ」

グリルの中にはこんがりと綺麗に焼けた魚。

皆の者。これぞ、こんがり魚じゃ。

「それじゃあ運ぼうか」

「そうだな。おい、義之ー由夢ー手伝ってくれー」

居間にいる二人の名前を呼ぶ。

義之はすぐに来てくれたが由夢はなかなか来てくれなかった。

「ゆ〜め〜？ これくらい手伝えー」

「や、かつたるいのでパス」

由夢ちゃん……兄さんはあなたをそんな子に育てた覚えはないわ！

「働かざるもの食うべからず。ってなわけで……」

そう！ 全国の兄は妹に甘えさせてはいけないのだよ！

「や、冗談ですから！」

すぐさま反論する由夢。

お前、クレープ食べたのにお腹はいっぱいじゃないのか？

「これを運べばいいんだな音姉」

「うん、お願いね義之くん」

せつせと机に料理品を運ぶ義之。

由夢も見習ってほしいよ。

「にしても……」

「ご飯置いてきた義之はニタニタと気持ち悪く笑いながら戻ってきた。

「二人ともお似合いだねえ。まさしく新婚さんって感じでしょうか？」

「にやーっと義之が言う。

「こいつ、調子のとてんな？」

「し、新婚さん〜!？」

音姉が顔を真っ赤にして驚いた声を出した。

「むう……」

由夢が俺をジリジリと睨み始める。

「ふん！」

そして一定時間睨み終わった後由夢はそっぽを向いた。

あと、原作知っているから言うが、もちろん由夢の服装はダサジャージ。

メガネとジャージという女の子には到底オススメしないものだ。

こんな姿見たら由夢ファンは果てしなく絶望だろうな。

「ったく……かったりい」

純一さん特有のかったるいを使いながら、俺はご飯を並べていった。

「し、新婚さん……」

まだ一人で別世界に行っている音姉はエプロンの裾を弄ったまま、ちらちらと俺の方を見てくる。

「私も、料理さえ出来れば……!」

なにか後ろから不吉な言葉も聞こえたが、構わず晩御飯の仕度を続けた。

「で、弟くんのクラスはなにをするの？」

いつも通り晩御飯を食べながら楽しくおしゃべりしていると急に音姉が質問しだした。

「なんのことだ？」

なんかうちのクラスでするっけ。

「もうっ！ クリパだよー」

「ああ、あれね。なんだっけ義之？」

「人形劇じゃなかったか？」

ああ、そうそう人形劇ね。

なんかすっかり忘れてたな。

「意外ですね……兄さんのクラスならもつとすごいしそうなのに」
由夢がちよつと驚いたように話す。

まああのメンバーならもつとはちゃけたことしそうだしな。

ん？ そのメンバーの中に俺は入ってないのかって？

H A H A H A 冗談キツイぜ？

「でも……弟くん達のことだから油断はできないよ」

音姉もちよつと真面目な視線になる。

その視線は間違いなく俺と義之にきてますよええ。

「ま、一応義之が主役だしちゃんとなるだろ多分」

「へ？ 義之くん主役なの！？」

「えっ……ま、まあなぜかそうなったけど」

「義之兄さんが主役なら、それはそれで凄いことになりそうですね

……」

「それは言えてるな。義之、絶対なんか凄いことするだろ」

俺は正直人形劇とかめんどつちいなあ……。

どっちかっていうとやる側より見る側だし？

「なにもするわけないだろ、悠斗！」

「客の前で腹踊りとか……ビール一気飲みとか……」

「俺達の出し物は飲み会か！？　そしてお酒は20歳から！」

なんとなく腹踊りを披露する義之の姿が頭に浮かんた。

そしてドイツ式ビール一気飲みをする義之。

ちなみにドイツ式ビール一気飲みとは、ドイツ人がビール一気飲みしたあとそのままビールグラスを投げるといふ、誰もが一度はあこがれることだ。

これでべんきょうになったね！

「どんな感じの劇なの？」

音姉は劇のシナリオに興味があるみたいだ。

たしかシナリオは……杏担当だっけ。

あいつなら、大丈夫なシナリオだよな多分……。

「クリスマスのラブロマンスとか言ってたっけ」

たしかそんな感じだったと思う。

「へえー！　おもしろそう！」

「兄さんはなんの役なんですか？」

「俺？　……俺って何の役だっけ……」

それどころか、聞いてないような気が……。

「雑務と、町の少年Aくんと、あと主役がいない場合の補欠役だったろ」

うわー……なんて微妙な役回り。

「弟くん前に出るの昔から嫌いだったもんね」

「そうだよ……俺、プレッシャーとかに弱いからさ」

「なんとなく分かりますそれ」

「俺、無理やり主役やらされたんだが……」

軽く落ち込む義之は放っておいて……。

「でも……弟くんのクラスって」

「問題児揃いですね……」

杏、茜、小恋、杉山、杉並、板橋……その他大勢。

「5バカ……」

「ちがうわっ!」

由夢が思わず口にしたことに俺はすぐ講義した。

「弟くんを中心に、義之くん・板橋くん・杉並くん・杉山くん……どれも要注意人物だね」

音姉がいつもの生徒会長モードになりながら俺達の名前を連呼する。

……精神的ダメージが……きてるよ俺……。

「なんで俺が中心なの!？」

「悠斗はともかく、俺は目立ったことしてないだろ？」

「あれ、さらりと俺無視？ 義之くんどゆこと？」

「義之兄さんは巻き添えみたいな感じですからね……兄さんは違いますけど」

「由夢さーん!？ 俺100%巻き添え食らってますからねー!？」

杉山とか杉並とかに酷い目に遭ってますからね!？」

ん？ ……なんか目から汗が。

「いや弟くんはブラックリストAランクに入ってるよ？」

「は？ 俺なにもしてないよ？」

うん本当に。ちょっと杉山とか杉並とか涉とかとやんちゃしてるだけで……。

うん。……多分。

「ナンパしてる現場を見つけては、ナンパした野郎をバスケットゴールに突っ込む」

義之が呆れたように言う。

「清水先生（ハゲてる中年先生）の頭にワックスをぶっかける」
由夢が呆れたように言う。

「しまいには歩道橋で大変そうにしているお婆さんを助ける」
音姉が呆れたように言う……って。

「いや音姉のは別にいいだろ！」

「ほんと、お姉ちゃんを困らせすぎです兄さん」

「そうだぞ悠斗。それに、音姉も怒るあの一物も持ってるしなにやり」

「ぶっ——！」

義之の言葉に思わず湯のみの茶を嘔き出してしまった。

「へ？ 私がなにになに？」

「なななな、何も無いよ音姉！ ウン！」

「兄さん……！ 私のご飯が……！」

「あ……」

よく見たら、由夢の食べていた物ほとんどが……うん。あれだよあれ。グチヨラーだよ。
多分俺の嘔き出したお茶が

……いや、この先は言えないや

「ああー……ごめんね由夢ちゃん。もうご飯残っていないの……」

音姉が申し訳なさそうに言った。

確かに、ご飯とオカズは綺麗に食べられていた。

「どうしてくれるんですか兄さん……」

「い、いやほら……あれだよ、あれ。そうダイエット！ ダイエットになるじゃないか！」

「私は太ってません！」

し、しまった！ダイエットとか言ってたせいで由夢の怒りが倍増してしまったじゃないか！

「さくらさんのご飯貰ったらいいんじゃないか？」

義之は冷蔵庫を指す。

「さくらさんのなんて悪いですよ！」

「でも今日も遅くなりそうだし……」

とか言ってる間に、ピンポンと悪夢のようなチャイムが芳乃家に鳴り響く。

「……まさか……」

またしても、ピンポンと鳴った。

「帰ってきちゃった感じ？」

今度は力チャカチャという鍵の音だ。

「ただいまー！ ごはんごはんー」

「……お、おかえりなさい……さくらさん」「」

由夢は絶望に満ちた顔をしていた。

「今、ご飯温めますね……」

「いつもごめんね音姫ちゃんー」

「いえ、大丈夫ですよ」

「……私のご飯……ブツブツ」

由夢はまだお腹は満ちていないようだ。

「由夢は……大丈夫か？」

「……我慢できますよそれくらい……ブツブツ……」

「わ、悪かったからなんか作ろうか？」

「作ってください」

「あ、即答なのねそこは」

仕方ないので適に残ってる物で……。生肉でいいか（オイ）

やっとこさ自分の部屋のベットに座れる。

今までなんか長かった……。

由夢には生肉出したら殺されかけるし、音姉には俺の大切なたいせつな、アレが見つかりそうになるし……さくらさんは帰るタイミングが凄まじくナイスだったし……義之だけだな疲労の元じゃないのは。

「なんかラジオでもやってるかなー……」

バスケットボール型の目覚まし時計。

これは義之が使っているのは別のもので義之はサッカーボールの目覚まし時計だ。

しかもこれがなかなか便利だったりする。

ラジオがついていて、なかなか高機能なのだ。

「おっ、この曲懐かしいな yozuca* か」

あと他にもエルニーニョ 絵梨奈とかいう……早口すぎて分からなかった。

「もう寝るか」

時刻はとくに12時を過ぎていた。

早く寝ないと音姉に明日怒られるな……。

……音姉ってなんか本物のお姉ちゃんみたいな感じで逆らえないんだよねあ。

電気を消す。

さっきまでラジオの音で騒がしく聞えたのがしーんと、静まり返ってしまった。

「（今日はなんか寝れない予感がする……）」
そうだったことはなかなかないのだが、この予感だけは当たりそうに思えた。

なんかこう……悪夢とかそういうものではなくて……。
どっちかというと悪魔みたいな……。

突然、明かりがついた。

「っ!？」

驚いてぱつと体を起こす。
今、確かに明かりがついた。

もちろん自分は触っても無い。……ということは。

「さくらさんだな？」

「えへへー♪ ばれちった？」

夜でもハイテンションのさくらさんが俺の部屋にぴよこんと入ってきた。

「もう……脅かすようなことしないでくださいよ」

「にやははーごめんね」

この人には仕事の疲労とか全く感じられない。むしろ元気なほど。

「なにか俺に用ですか？」

「んーとね……ちょっと待ってね」

さくらさんはガサゴソとポリ袋の中を探している。
というかポリ袋の中、すんごい入ってるんだけど……。

「うわー……」

「これ！ 帰りにレンタル屋さんで借りた大岡裁き！ 全26話！
いっしょに観よー♪」

「さーで、明日も学校だしそろそろ寝なきゃなあー」

言いながらベットに半分入った。

「ううー！一緒に観ようよ観ようよー！」

あんたは駄々こねる子供かっ！

「俺、時代劇眠くなるし音姉に怒られますって」

「うー……音姉ちゃん怒ると怖いしね……」

あのさくらさんも逆らえない存在、それがおかん音姉。

「じゃあ一人寂しく観るとするよ……」

「はい、おやすみなさい」

とまでは言っただものの……。

「ちら、ちら」

「……………」

「じ——」

「……………」

「……………だめ、かな……………」

「ああー分かった！分かりましたよ！素直に音姉に怒られま
すよー！」

「わーいそれでこそ悠斗くんだよー！」

はあ……明日の言い訳を今のうちに考えなきゃな。

「で、何時まで観るんですか？」

「へ？もちろん全話終わるまでだよ？」

「……………」

さっきいいと言った自分が急にむかついてきたわ。

仕方ないから明日、義之か涉に八つ当たりしよう。

俺の寝れない予感……モロ当たっていた。

家族の団樂は大切だぞ！（後書き）

悠斗「もうこのコーナー飽きてきたよ」

作者「出演者が何言ってるんだよ！　もっと熱くなれよ！」

悠斗「はい、んじゃさつさと歌」

作者「言葉のキャッチボール全面的に拒否だなオイ！」

くサクラアマネクセカイ　意味無くフル再生く

悠斗「名曲だ…… y o z u c a *さん最強すぎる」

作者「D・C・の歌はとても歌いやすいから大きい子供も小さい子供もみんな歌ってみようね！」

次回、『学校生活に慣れてくるとだるくなるよね』それでは♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、^{たんのう}堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7952v/>

D.C.? ~ 運命の歯車が廻るとき ~

2011年10月4日03時31分発行